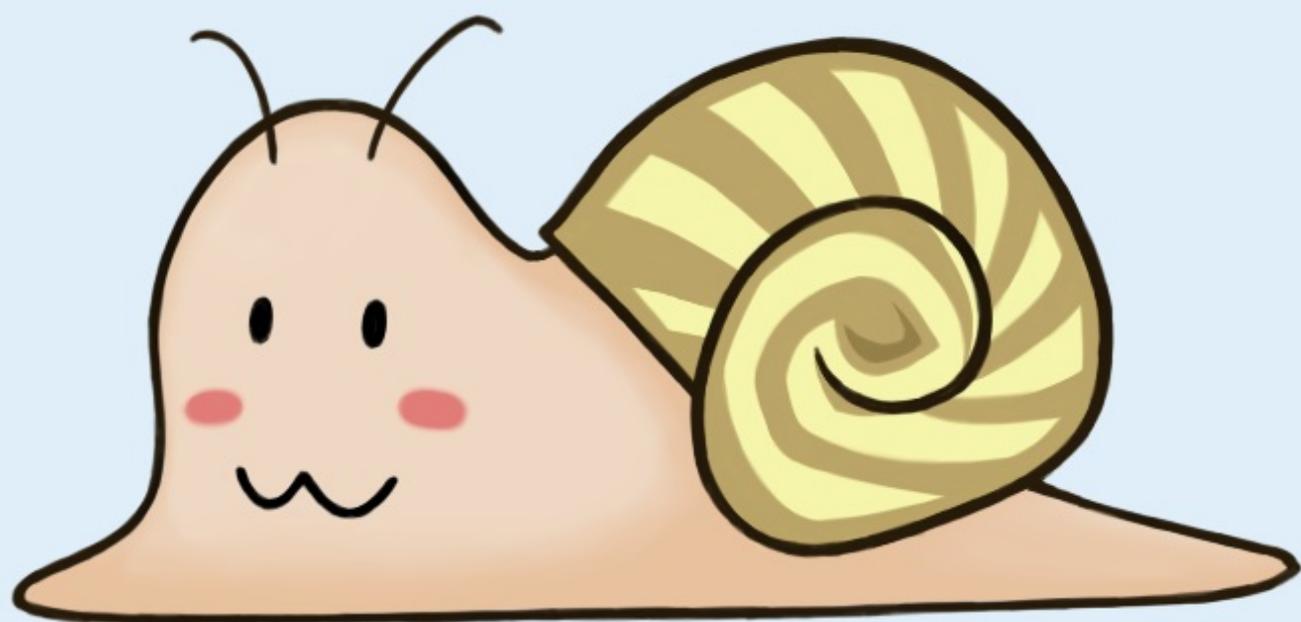


クラムヘッド氏の 華麗な日常



あけの まだし

私の名はマイケル・クラムヘッド。生まれがどこかは忘れてしまった。どこか遠い星だったような気もするが、正直どうでもいい。今は日本に住んでいる。

今朝も5時に起床した。最近早起きに変えてからとても体調が良い。夜型になろうと思えばなれるが、私は周りが明るくなったら行動し、暗くなったら寝る方が自然だと思うようになった。その方がエネルギー効率もいいし。さて、涼しいうちに朝食の用意でもしようか。

「あ、マイケル、おはよう」

部屋で飼っているカタツムリのスマイルが殻から頭を出して私に挨拶した。

「おはよう、スマイル」

「マイケル、髪が伸びたね。そろそろ床屋に行ったらどうだい？」

「3ヶ月前に行ったばかりだ」

最近安い床屋が増えてきたとはいえ、出費はなるべく控えたいものだ。残念ながら我が家の家計は益々厳しさを増しつつある。

「人間って不便だね。髪の毛とか、爪とかどんどん伸びるしさ」

「全くだ。スマイル、お前はいいよな。面倒が少なくて」

「そんなことはないよ。僕にだって色々苦労はあるさ」

まあ、野生のカタツムリならそういう発言も少しは許されるだろう。だが、私の部屋で与えられた食べ物を毎日享受してるだけのこいつには言うて欲しくないものだ。

「お前、どんな苦労をしてるって言うんだ。ちょっと言ってみろ」

「僕はこの殻を維持する為に日々カルシウムを摂取しなければならないんだ」

「だからさ、お前はその為に何かしてるか？」

「してるよ。マイケルの相手をしてやって、餌をもらってやってるだろ」

「偉そうに。たまには自分でカルシウムを補給しろ。昨日雨が降ったからコンクリートから滲み出ているだろ。行って舐めて来い」

「やだね。僕は有機物からしかカルシウムを摂らないことにしているんだ」

「何が有機物だ。だったら自分の殻をかじって補給しろ、巻き貝め」

「マイケルだって頭は二枚貝じゃないか」

こいつ、また私の名前をネタにしたな。

「あのな、クラムヘッドのクラムってのは、二枚貝とか、クラムチャウダーから来ているわけじゃないんだぞ」

「じゃ、何なのさ？」

「別に何も無い。ただそういう名前だっただけだ」

「何だ、つまんないの」

名前の由来なんてどうでもいい。エベレストの「エベ」はどこから来たかなんて誰も知らないだろ。きっと天からでも降ってきたのさ。

「さて、ちょっと食材の調達に行ってくる」

「あ、気をつけてね」

「お前こそな。最近、コソ泥が増えてるらしいぞ」

「大丈夫だよ。悪い人が来たら殻に潜るから」

こいつ、自分の身はしっかり守るが、私の大事な財産を守ろうという気は全くないようだな…。まあ、カタツムリに番犬の役割を期待する方が無理だが。

薄い朝の日差しを背に受け、私は近所の牧草地に向かった。目的はクローバーだ。

意外と知らない人も多いようだが、マメ科の植物であるクローバーは食べることが出来る。牛やウサギだけに食わせておくのはもったいない。

「おはよう、おじさん」

「おお、早いねマイケル」

農家のおじさんがトラクターから降りてやってきた。いつも親切にしてくれる気さくな人だ。

「ちょっとクローバーをもらいたいんだけど」

「ああ、いいとも。好きなだけ持っていきな」

おじさんの許可を得て、私はせっせとクローバーを摘み始めた。

「今朝はスマイルは来ないのかい？」

「うん、あいつ歩くの遅いからね」

「ははは、確かに。うちの牛たちより遅いな、彼は」

カタツムリは歩くと言うのが正しいのかどうか知らないが、まあ、あいつより遅い奴はそうそういないな。

「マイケル、仕事の方はどうだい？」

「うーん、まあまあだね...」

「ははは、歯切れが悪いじゃないか」

まあ、こんな所でクローバーを摘んでる奴は野草愛好家か貧乏人か、どっちかだよな。

「インターネットの時代になっても、文筆家というのは大変そうだなあ」

「うーん、そうなんだよね...」

「私はマイケルの書くお話は好きなんだがなあ、のんびりした味わいがあるって」

世の中にこのおじさんみたいな話の分かる人が増えてくれれば私も少しはマシな生活が出来るところな。

さて、この位あればいいだろう。

「ありがとう、おじさん」

「マイケル、納屋の所にさっき絞った牛乳があるから持っていきな」

「あ、どうも...」

どう考えてもクローバーよりもおじさんが分けてくれる牛乳の方が栄養価は上だよな。まあ、もらえるのを期待して来てたりするわけなんだがね。

「ただいま」

「あ、お帰り。早かったね」

「さーて、朝飯を作るか」

私は摘んできたクローバーの4分の1程を洗った。そして卵を3個割って一緒にボールで混ぜた。

「あ、クローバーのオムレツだね」

「お前の分は無いぞ、スマイル」

「マイケル、僕をないがしろにすると酷い目に会うよ」

「ほう、何を根拠にそんな妄想を」

「マイケルの精神は僕の世話をする事で安定性を保てるようになっているんだ」

「ばかばかしい」

「想像してごらんよ、マイケル。僕が居なくなった世の中を」

「そうだな、きつとうるさい小姑を山に捨ててきた位の爽快感がありそうだ」

「根本的に間違ってるね。大体、僕の世話なんて大した重労働じゃない。食べる量もたかがしれてるし」

そりゃそうだ。これだけ口うるさくて食べる量も人間並みだったらたまらんぜ。

「やっぱり、コストパフォーマンスから考えても、家で飼うならカタツムリだね」

「飼われてる側の言う事か」

私は焼きあがったオムレツの端っこをちぎって小皿に分けた。

「ありがたく思えよ、スマイル」

「うん、もちろん思ってるさ」

スマイルはのそのそとテーブルの上を移動してオムレツの切れ端に辿り着いた。

「いただきます」

「いただきます」

朝食、開始。

「美味いか、スマイル」

「うん」

「せいぜい食って太っておけよ」

「どうして？」

「大きくなったらお前を食べようと思ってるのさ」

「まあ、僕並みに清潔に飼育されたカタツムリなら美味いだろうね」

「どうやって食われたい？リクエストがあるなら聞いておくぞ」

「そうだね、マイケルのレバーと一緒に炒めたらいいんじゃないかな」

「悪くないな。考えておこう」

朝食、終了。

さて、腹も満たされたし涼しい午前中に張り切って仕事をするのでしょうか。私はパソコンの電源を入れた。

「仕事の時間だぞ、スマイル」

「えーと、どこまで進んでたんだっけ」

私はワープロを立ち上げて現在執筆中の作品の進行状況を確認した。

「ああ、主人公が採ってきたキノコを図鑑で調べたが載ってないってとこまでだ」

「そうだったね、マイケル」

「で、どうする？」

「うーん...、ネットで検索することにしようよ。それで、凄く怪しげなサイトに当たってしまうんだ」

「なる程な。じゃ、頼む」

私はスマイルが唱える文章を慣れた手つきで打ち込んでいった・・・